

[講演]

今、そしてこれから必要 とされる GC： 高等教育機関における 日本語教育から考える

異文化コミュニケーション学部教授
池田 伸子 氏

○任 皆様、それでは時間になりましたので、最後の講演に移ります。最後のご講演は池田先生からいただきます。ご講演のタイトルは「今、そしてこれから必要とされるグローバル・コンピテンス—高等教育機関における日本語教育から考える」です。池田先生、どうぞよろしくお願いたします。

○池田 どうぞよろしくお願いたします。画面見えているでしょうか。毎年この企画で私の番になるときに、開口一番お伝えすることが、巻きでまいりますということです。今回お伝えしたいことはたくさんありますけれども、なるべくポイントを押さえて、テンポよく進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。【スライド⑤-1】

まず、本日の最初ですけれども、立教大学では、ご覧いただいているように、真理を探究し、私たちも世界、そして社会、隣人のために一人一人の個性を重視した人間教育を行おうという大きな理念を掲げて教育を行っています。そんな立教大学では、何年か継続してこの企画でお伝えしてきていますように、Rikkyo Global 24、それから TGU を通して新しい立教大学が考えるグローバルリーダーを育成しようとしています。

そのグローバルリーダーの備えている能力というのを3つ、立教大学としては考えていて、そこにご覧いただいているような、変革力、そして共感・協働力、そして思考力というこの3つに集約をしています。この3つの力は、これまで今日プレゼンをしてくださった森平先生、それから坂本先生、三島先生のプレゼンの中でも十分それぞれの言語の教育を通して身につけていけるものなのではないかということが感じていただけたのではないかと思います。立教大学としては、

この Global 24 で定めたグローバルリーダーに必要な力を知識、技能、態度、体験、こういうことを通してみんなに4年間を通して身につけてもらいたいと考えているのですが、やはり個人的に見ていて、どうしても知識の部分に偏りが出ているのではないかと感じています。ここは三島先生がお示しくくださった問題提起と重なるところがあるのではないかなと思っています。【スライド⑤-2】

本日のテーマでもありますグローバル・コンピテンスですけども、坂本先生のスライドにもありましたように、私も OECD のグローバル・コンピテンスを持ってきています。ご覧いただいているように、OECD が考えるグローバル・コンピテンスというのは、ご覧いただいている4点ですね。地域的、それから世界的、そして異文化間の問題を検討する能力、他者の視点と世界観を理解し認める能力、異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的なかかわりを持つ能力、そして、共同体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力。この4つなんです。この4つというのは、立教大学が育てようとしているグローバルリーダーの備える能力とかなりの部分が重なっているように思いますが、このグローバル・コンピテンスの4側面を見ていくと、知識だけではなくて、最後のところですね。行動する能力、それもかなり重視しているということが見てとれるかと思えます。

つまり、知識や態度から行動へという、明らかにこういう学生というか、人材を求めているということが見ていただけるのではないかと思います。その上でなんですけれども、外国語教育というのが、そのグローバル・コンピテンスを育成するために中心的な構成要素であるということは、OECD でグローバル・コンピテンスにかかわった方が明言をしています。つまり、グローバルリーダーの育成、グローバルリーダーに必要な力、グローバル・コンピテンスを育成する、そのためには外国の教育というのが重要な役割を持っているのだということです。

【スライド⑤-3】

ご覧いただいていますように、立教大学では、英語、それから英語以外の言語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語というのが必修になっていて、外国人の留学生に対しては、日本語というのが選択できる言語としてございます。この英語、それから英語以外の言語の学習を通して論理的な思考であったり、複文化的な視線であったり、異文化的な理解であったり、異文化理解であったりというのが、今日プレゼンをしてくださった先生方のお話を通し

て育成されているのだなと感じていただけたのではないかと思います。この英語、それから英語以外の言語を通して、この論理的な思考であったり複文化的な視点であったり、日本以外の異文化の理解を身につけていくというのは、多くの日本語を母語とする学生にとってとても重要なことなのですが、日本語を見てみると、今このくくりの中で日本語を履修できるのは、外国人留学生だけということになっています。その日本語に求められている目的というのは、外国人留学生の外国語としての日本語能力、大学で学んでいくための日本語能力を身につけていくこと。これが大きな目的になっています。ですから、言語としての日本語能力を向上させること、それからスキルとして日本語という言語を使って大学というアカデミックな場でレポートを書いたりプレゼンをしたりというような技能を身につけていくこと。そこにやはり重きが置かれているということがあります。隠れた目的としては、学生たちが日本に着地していくことであったり、立教大学に着地していくことが目指されていて、こういう意味においては、日本語教育、この日本語の科目というのは外国人留学生にとって非常に大切な位置づけの科目になっています。

なので、もちろんこれはとても大切なのですが、私は日本語の担当教員として常々それだけでいいのかという思いをずっと持ち続けてきました。それが今日のテーマでもありますグローバル・コンピテンスというのにかかわることになるんですが、私は個人的にグローバル・コンピテンスというのは、人が外国語を用いて、いわゆる自分の国から外に出て行って、そこで必要とされる力ではないと思っています。つまりこのグローバル化した世界というのは、もう自分の国も外国もへったくれもない、みんなが同じグローバルな社会の中で協働して生きていく。そのときに必要となる力なので、日本から出て何かをするときに必要になる能力とか、あるいは国内であっても、何か外国語を用いて他の人たちと協働していくときに、必要となる力ではないと思っているからです。そういうふう考えたときに、立教大学の中で行われている、このいわゆる外国語の授業を通して育成されていくであろうグローバル・コンピテンスというのは、どこか欠けがあるんじゃないかと常々思ってきたということがあります。それが、今日私がこれからお話ししていくメインのポイントになってまいります。**【スライド⑤-4】**

今お話をしましたように、今の日本国内の状況はというと、もう2020年現在、非常に多くの外国人が日本国内で生活をしています。注目をしたいだけなのは、

今回は人数ではなくて、どこの国の人たち、どの地域の人たちが日本で生活をしているかということなんですが、中国、韓国、それからベトナム、フィリピン、それからブラジル、ネパール、インドネシア、タイ、それからその他のところも非常に多いということが分かります。これを例えば立教大学の言語のラインナップで見ると、中国語 OK です、韓国語 OK です、それから英語もあるので米国 OK ですが、それ以外の言語のところは、立教大学としてはカバーできていないということになります。【スライド⑤-5】

さらにもう 1 つ見ていただきたいのが、では、日本にいる外国人の人たちというのは、どんな日本語力なのかということなんですけれども、ちょっとざっくりした結果ではありますけれども、全くできないというグレーの部分のパーセンテージというのは、私たち日本人が思っているよりも少ないということが見ていただけるかと思います。これ自己申告、自分はどのぐらいですかというような調査なので、本当にそうかというのはちょっと確かではありませんけれども、日本語での会話はほとんどできないという人に比べて、日本語で何とかできる、あるいは同程度に会話できるという人たちがかなりの数いるということが見ていただけると思います。【スライド⑤-6】

自己申告ではそのように 8 割、7 割、国によっては 6 割の人たちが日本語できる、日常会話で大丈夫と答えてはいるのですが、また別の調査になると、そういう人たちがいろいろな場面で日本語が十分にできなくて困ったり、嫌な思いをしているということが見ていただけるかと思います。職場であるとか、そういうところ、学校教育の場というのは、ある程度、高度な能力が必要になってくる場かもしれませんけれども、例えば近所づきあいであるとか、役所の窓口であるとか、そういうところでさえも、やっぱり日本語が十分にできなくて困ったり嫌な思いをしている人たちがいるということになります。先ほど申し上げたように、私が考えるグローバル・コンピテンスというのは、何も外国に出て行って必要とされる能力でもなければ、外国語を使って何かをするときに必要とされる能力でもなくて、自分以外のいろいろな人と協働して何かを進めていく、あるいは自分以外のさまざまな多様な人たちと 1 つのコミュニティを作り上げていく。そういうときに必要とされる能力だと思っていますので、これから私たちが育成していかなければいけないグローバル・コンピテンス、それを備えた人材というのは、自分の母語以外の言語の学習を通して複文化、複言語的視点を持ち、これ

が必要。だから、英語だったり、中国語だったり、それからドイツ語だったりというような学習というのは、これはもちろん必要だけれども、言語の能力アップだけではなくて、そこに複文化、複言語的な視点、それを必ず育成するようなプログラムであってほしいと思いますし、それを通して自分と異なる文化や価値観を理解して尊重する知識や態度、これを持っていること。これももちろん必要。ここまではいいんですが、私が欠けていると思っているのは、多くの学生にとって母語で日本語という言葉、それを適切に使って多様な言語を持つ他者とつながることのできる行動できる人材なのではないかということです。【スライド⑤-7】

そこで、立教大学の日本語教育センターでは、学内に来年からもっと多様な日本語力を持った留学生が入ってくるということをきっかけとして、そのやさしい日本語というものをしっかりと使える学生、そして、それだけではなくて、つながろうとする姿勢や態度、これを備えた学生。それを育成していく仕組みというものが必要ではないかと考えたということです。やさしい日本語のスキルや、つながろうとする姿勢、態度。それに加えて、多くの日本語を母語とする人たちは、今度は受け入れるという場になったときには、ホストとしてどう振る舞うべきか、どう行動していくべきかということが求められていきますので、それに対する構え、そういうようなものを身につける、そういう科目が必要ではないかと考えたということです。【スライド⑤-8】

そのために、私たちは新たな試みとして、新しく入ってくる日本語能力が JLPT、N3 程度の留学生と、それから日本語母語話者、プラス日本語が非常にできる上級レベルの留学生、それを対象とした 2 つのクラスを合同的に実施するという試みを始めます。これが日本語教育センターの新たな挑戦となるのですが、日本語力が N3 の留学生のクラスでは、もちろんやさしい日本語で学びながら、立教大学、それから所属学部への着地をしていく。プラス、日本語力も向上していく。日本語母語、それから日本語上級の留学生に対しては、やさしい日本語の知識やスキルだけではなくて、受け入れ側の構え、態度の醸成で、授業で実践していきたいと思っているのが態度から行動へということなんです。態度から行動に移していくためには、さらにワンステップ必要になってきますので、単に机に向かって勉強するだけではなくて、プロジェクトであったり、ロールプレイであったり、さまざまな仕組みを作りながら、行動に結びつく科目運営をしていきたいと思っています。これは日本で生きる留学生、日本で生きる外国の人たちにと

っても必要になってくる力です。なので、日本語が上級の留学生にとっても非常に役に立つのではないかと考えています。【スライド⑤-9】

この2つの科目を一体的に運営することによって、この日本語母語話者、それから日本語上級留学生は支援する側ではなくて、対等につながろうとする態度、これを身につけていく。どうしてもやはり受け入れ側ということになると、日本語ができない、日本語能力が十分ではない人たちに日本語能力が高い人たちがどう支援をしていくかと考えがちなんですけれども、対等につながろうとする態度ということを目指したいと思っています。さらに、他者を尊重することと同調することは別なんだということです。これはおそらく英語でやっているディベートともつながっていくと思うんですが、弱者、マイノリティの人たちに対して同調していくことは尊重することではありませんので、しっかりと議論を戦わせて、解決策を導いていくというような科目にするべきだと思っています。また、国籍ではなくて、その人間一人として捉える態度。これもこの科目を通して醸成できればと思っています。そういうことをさまざまな活動を通して実践をしていく中で一人一人が、自分の自分を知って、自分の得意な役割果たすべき役割を認識していくということが重要だと考えています。

さらにこの科目を運営する上で大事だと思っているのは、やはり支援をしてあげるという視点からの脱却です。橋渡しをしたいとか架け橋になりたいというところ、そこを一步超えてほしいと思っています。どういうふうを考えて欲しいかという、もうそこにある川をなくしていこうと考える。そういう態度を醸成することを目指したいと考えています。川がなくなれば自然につながっていく、橋は必要ないということになりますので、架け橋、橋渡しから、そこに川が存在するということから一步進んで、川をなくす、川をなくしていこうという態度を醸成したいと考えています。【スライド⑤-10】

最後にですけれども、私が考えるコンピテンシーというのは、行動まで含まれていますので、やはり教師評価、自己評価、他者評価を用いたもの、そして継続的に行動まで含んだ形で評価をしていけないかと考えております。ここについては後ほど、いろいろとご意見を伺いたいと思っています。立教が目指すグローバル・コンピテンシーは、ご覧いただいているようにやはりいろいろなピースが集まって完成されるべきものだと思っていて、言語教育、英語それから少言語教育、それから日本語教育、それに加えて学部専門教育、それからさまざまな体験

型、経験型の活動。それが今までであったもの。そこに今回の新しい試みがはまることによって、立教大学が目指すグローバル・コンピテンシーというのが完成されていくのではないかと考えています。

私としては、この今回の試みが、しっかりと評価にまで結びついて、その評価がエビデンスとしてちゃんと発信できていく。そういうところを目指したいと考えていますので、今日のさまざまな討論であったり、コメントについては非常に期待をしています。【スライド⑤-11】 ご清聴ありがとうございました。【スライド⑤-12】

○丸山 池田先生どうもありがとうございました。それでは、短く質問の時間をとりたいと思います。この後、全体討議でも話し合っていくチャンスありますが、ぜひ事実確認等ありましたらご質問いただければと思います。ご質問の際には挙手、「手を挙げる」のボタン押ししていただきまして、初めにご所属と名前をお願いいたします。いかがでしょうか。よろしゅうございますか。私たちの日本語教育センターの、本当に来年度から大切に、坂本先生、また手を挙げてくださりましてありがとうございました。私がしゃべるのはやめて坂本先生、お願いいたします。

○坂本 このやさしい日本語というところに関してちょっとお尋ねしたいなと思ったんですけども、どの程度、今、そのやさしい日本語というコンセプトが日本語教育の中で広まっているというおかしいかもしれないですけども、もう当たり前のこととして認識されてるレベルのものですか。

○池田 ありがとうございます。日本語教育に携わっている人たちの間では、やさしい日本語という概念考え方についてはかなり普及しているのですが、日本語教育に携わっている人たちの間でいくら普及しても日本の国が変わらない。日本語教育に携わっている人以外のところでも、行政、役所の部分ですとか、あるいは、順天堂大学とか、そういう病院医療関係の人たちで、心ある人たちはワークショップを開いて、やさしい日本語で何かをやっていこうという試みが始まりつつありますが、私としてはそれ以外の分野。例えば、立教大学で言うと、福祉の分野に進む人もいるし、それから法律の分野に進む人もいるし、それから先生になる人もいるし、そういう人たちみんながこの概念、それから、ある程度の運用力というのを持っているべきだと思っています。

そういう職業に就かなくても、一人のコミュニティの人間として、そこで生活

をしていく人にとって必要なものだし、そういうふうになっていくと、日本の社会が変わっていくんじゃないかと思っていますので、ぜひ立教卒の人間が、そういうふうにいるところ種になってほしいなという思いでいます。

○坂本 ありがとうございます。結構、一般社会で、誤解と言うとまたあれですけども、恐らく簡単に話すということイコール、いわゆるフォリナートークとか、あるいは赤ちゃん言葉を使うみたいな、何かそういう傾向はあると思うんです。でもそれじゃないわけなので、そこら辺のその認識というのはとても大事なことだな。つまり、先ほどのスライドにもありましたけれども、1人の、どう書いていたかな、本当になるという、その考え方というのはとても大事なところと共感をしましたので、ちょっとご質問というかコメントいたしました。

○池田 ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。三島先生も手を挙げてくださいましたので願いたいします。

○三島 池田先生、ありがとうございます。僕も同じポイントですごく、アメリカに長く住んでいたの、これはアメリカ人全部がというわけじゃないんですが、特にモノリンガルの多くの人は、あれだけ移民がたくさんいても、絶対速度も落とさないし、通じていないのがわかっているのに同じことを繰り返すんですね。

そういう、何でしょうね、ほんとショッピングしても何してもそうなんですけれども、地域性ももちろんアメリカの中ではありますが、僕がやはり留学、一番最初に行ったときとかは、本当に通じていないのを横目で見ていて、お店のおばさんが怒っているんですよ。ただ大きい声を上げていくだけで。それがすごく違和感を感じたのがあって、移民の方々に対し、何でしょうね、やはり通じない。普通はインタラクションしているわけですから通じなかつたら変えますよね。でも、そこはそういう意識が全くないんだなというか、そういう、何と言うんですかね、レパトリーというか、コミュニケーションのレパトリーそのものが存在していない。

その辺に関してはすごくアメリカの大学の中の、例えばドメスティックの学生とTA、たくさん留学生がいて、やはり修士や博士を取っているTAの方々がいまですけども、やはり英語がどうしても拙いところで学生とのコミュニケーションがうまくいかなくて問題が起きる。いつもフォーカスされるのは、英語をマスターしてきてないそっちが悪いで、母国にいる我々はこの国の人間なんだから好

きなように話してもいいというようなレトリックがね、何か本当に無意識下かもしれないですけども、存在しているなという感覚はすごくありました。なので、やはりアメリカの中でも、アメリカ人の学生もトレーニングしなきゃいけないということは言われることは何度か耳にいたしました。

○池田 はい。本当にそうだと思います。何かでもちょっと、ちょっとアメリカ人もよくなってきて、多様な英語を認めましょうみたいにはなっているじゃないですか。

○三島 そうですね。随分変わってきているけれども。

○池田 そうそう。だから相手に完璧を求めない、そこまで降りてきたかと思って見ていますけれども、でも自分たちの言語を見直そうというのがないんで、だから、やはりそれは日本という国が、本当に芽が出てきた、とっても素晴らしいところだと思いますけれども、でもやさしい日本語をやっていくときには、その限界を知っていくということも大切で、やさしい日本があるからこそ、やさしい日本を知っているからこそ、例えば英語をもっと勉強しなきゃいけないとか、中国語がもっとうまくならないといけないとか、ドイツ語がもっとうまくないと、本当の意味での、何というんでしょうか、多文化共生というのは実現しないということにもつながっていくので、今回、立教大学が全ての学部の学生を対象にこういう科目を始めるということは、すごく画期的だと自画自賛しております。

○三島 いや、画期的だと本当に思います。

○池田 ありがとうございます。

○三島 はい。

○池田 じゃあ、任先生、お願いします。

○任 はい。池田先生、先生方、貴重なお話、ありがとうございました。

【スライド⑤-1】

今、そしてこれから必要とされるGC
高等教育機関における日本語教育から考える



立教大学
日本語教育センター
池田 伸子

【スライド⑤-2】

立教大学

PRO DEO ET PATRIA (神と国のために)

真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために
一人ひとりの個性を重視した人間教育

Rikkyo Global 24, TGU

新たなグローバル・リーダーの育成

知識
技能
態度
体験



国境を越えて流動化する社会に柔軟に対応し、新しい仕組みを生み出していく変革力


豊かなコミュニケーション力で異なる文化、習慣を持つ人々とともに課題を解決する共感・協働力

地球規模の困難な課題に向き合い、問題の本質を理論的に解明する思考力

【スライド⑤-3】

立教大学が育成するGLが持つ力=GC

グローバル コンピテンス (GC)



グローバル・コンピテンス4側面 (OECD,2018)

- 1) 地域的、世界的、そして異文化間の問題を検討する能力
- 2) 他者の視点と世界観を理解し認める能力
- 3) 異なる文化を持つ人々とオープンで適切で効果的な関わりを持つ能力
- 4) 共同体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力

↓

静（知識、態度）から動（行動）へ

【スライド⑤-4】

外国語学習はグローバル・コンピテンスの中心的な構成要素


Mansilla and Jackson (2011)

英語

独、仏、西、中、朝、露


日本語

論理的思考
複文化的視点
異文化理解 等

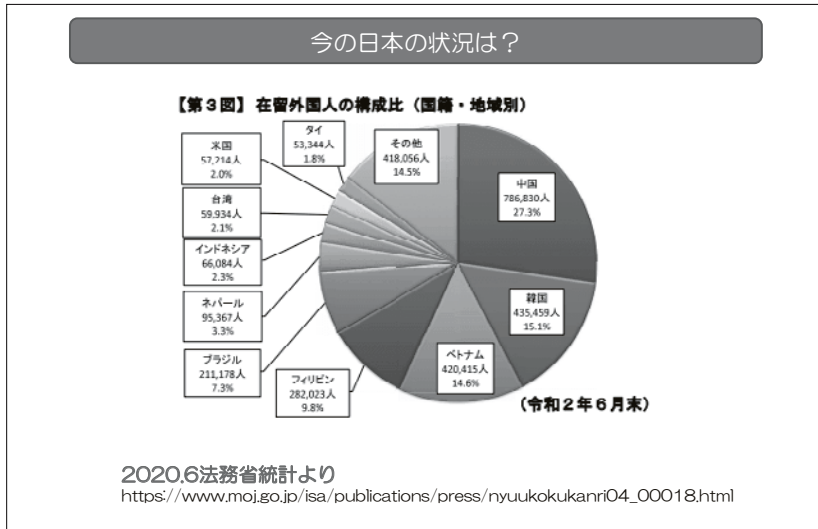


外国人留学生を対象
外国語としての日本語能力の向上
日本への着地、立教大学への着地

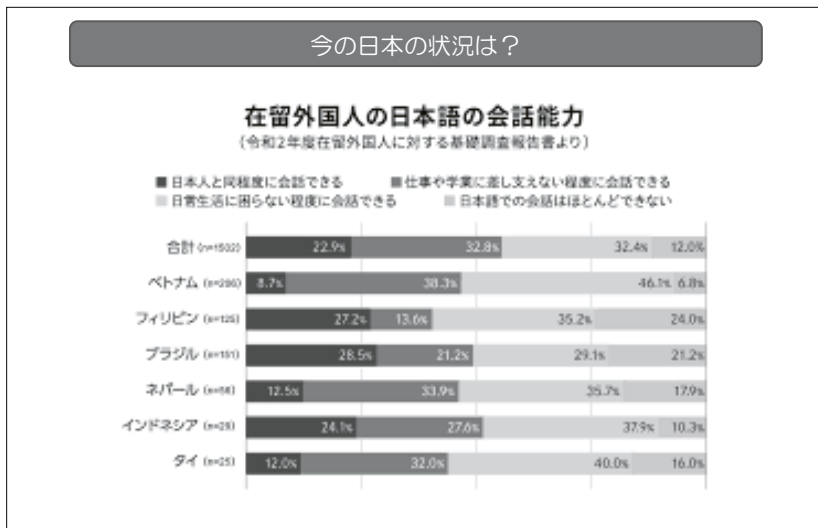
もちろん、これはとても大切！
でも。。



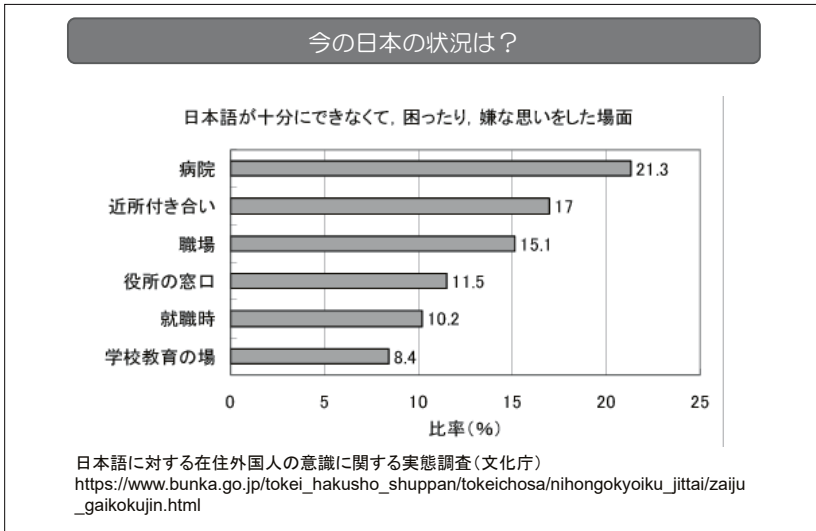
【スライド⑤-5】



【スライド⑤-6】




【スライド⑤-7】



【スライド⑤-8】

21世紀の日本に求められる人材

自分の母語以外の言語の学習を通して、複文化・複言語的視点を持ち
自分と異なる文化や価値観を理解し尊重する知識や態度を持ち
日本語という言語を“適切に”使って
他者とつながることのできる、行動できる人材




「やさしい日本語」(易しい、優しい)のスキル
つながろうとする姿勢、態度
コミュニティのホスト(受け入れ側)としての構え

【スライド⑤-9】

新たな試み！

日本語母語話者、日本語力の高い留学生を対象
日本語力N3程度の留学生との合同授業体制



日本語教育センターの新たな挑戦

日本語力N3の留学生

日本語母語、日本語上級留学生

「多文化共生社会を創る」をキーワードに事例研究、討論、グループプロジェクトを進める。

やさしい日本語で学ぶ。
立教大学、所属学部への着地。
日本語力向上。

やさしい日本語の知識、スキル。
受け入れ側の構え、態度の醸成。
態度から行動へ。
日本で生きる留学生にも必要！

【スライド⑤-10】

2つの科目を「一体的」に実施することによって

日本語母語話者・日本語上級留学生


支援する側 ではなく、対等につながろうとする態度

他者を尊重すること≠同調すること

国籍ではなく「一人ひとり」として とらえる態度

一人ひとりが自分の役割を認識

「橋渡し」「架け橋」になろうとする。
そこを超えて、
そこにある「川」をなくしていこうと考
える態度の醸成



川をなくせば、「自然に」つながる

【スライド⑤-11】

では、その学びをどう評価、可視化していくのか

コンピテンシー モデルを用いた評価

教師評価、自己評価、他者評価
継続的に追いかける？
行動まで追えるか???

立教が目指すGC

今回の新しい試み

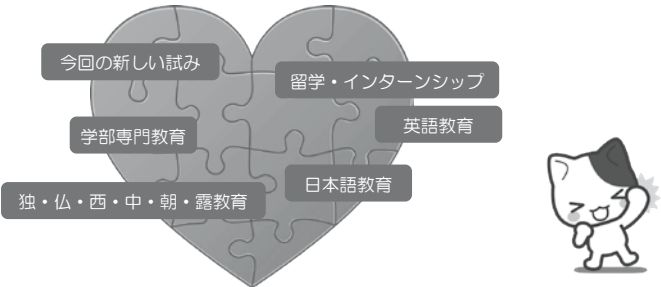
留学・インターンシップ

学部専門教育

英語教育

日本語教育

独・仏・西・中・朝・露教育



The slide features a central heart shape made of puzzle pieces. Surrounding the heart are several text boxes: '立教が目指すGC' (top right), '今回の新しい試み' (left), '留学・インターンシップ' (right), '学部専門教育' (left), '英語教育' (right), '日本語教育' (right), and '独・仏・西・中・朝・露教育' (bottom left). Above the heart, there are three lines of text: 'では、その学びをどう評価、可視化していくのか', 'コンピテンシー モデルを用いた評価', and '教師評価、自己評価、他者評価 継続的に追いかける? 行動まで追えるか???'. A small cartoon cat is standing to the right of the heart.

【スライド⑤-12】

ご清聴ありがとうございました



The slide shows a cartoon dog with its head bowed in a bowing gesture, centered at the bottom. Above it is a dark grey rounded rectangle containing the text 'ご清聴ありがとうございました'.

【スライド⑤-13】

参考文献 等

Mansilla, V. B. & Jackson, A. (2011). Educating for Global Competence: Preparing Our Youth to Engage the World. Council of Chief State School Officers' EdStep Initiative & Asia Society Partnership for Global Learning. Retrieved from <http://asiasociety.org/files/book-globalcompetence.pdf>

OECD (2018). Preparing our Youth for an Inclusive and Sustainable World: The OECD PISA Global Competence Framework. Retrieved from www.oecd.org/pisa/Handbook-PISA-2018-Global-Competence.pdf

出入国在留管理庁 令和2年度 在留外国人に対する基礎調査報告書
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001341984.pdf>